



みどころ

ハリウッド映画からの逆輸入によって、ボンヤリとしか知らなかった渋谷のハチ公物語の全貌を把握！そしてシンプルな話ながらやっぱり涙を誘う物語だったことを実感！それには駅、住居、コミュニティの3要素が大切だが、本作のそれは？また「子供目線」ならぬ「犬の目線」が新鮮だし、後半のハチ公だけで持たせる脚本の腕力にも関心！子供の情操教育には是非こんな映画の活用を！

* * * * *

ハチ公物語の感動をはじめて！

私は「忠犬ハチ公」や「ハチ公物語」という言葉を知っていても1987年の神山征二郎監督の大ヒット作『ハチ公物語』を観ていない。また1923年に生まれた秋田犬のハチと東京帝国大学農学部の上野英三郎教授との間に生まれた感動の物語もきちんと知らなかった。しかし、そんなちょっとした感動話話チラシを一通り読めばすぐ頭に入るもの。また忠犬ハチ公は飼い主の上野教授が1925年に急逝した後、13歳で死亡するまで9年間もずっと渋谷駅に飼い主を迎えに通いましたとき、というだけのストーリーではいくら何でも単純すぎる。そう考えた私は、積極的に本作を観ようという意欲はなかったが、たまたま時間が空いたため行くことに。しかしそれによってハチ公物語の感動をはじめて体験！

駅、住居、コミュニティの3要素が大切

本作が予想以上によくできていると感じたのは途中でリタイア(?)してしまう人間の主人公パーカー・ウィルソン(リチャード・ギア)に対し、最後まで主役をつとめる秋田

犬の主人公ハチの演技(？)がよかったのはもちろんだが、舞台設定が見事だったことが大きい。つまり、駅と住居とコミュニティという3要素の調和が絶妙だったということだ。まず、駅は大きすぎても小さすぎてもダメ。もっと正確に言うと大きすぎたのでは絶対にダメで、逆に小さすぎるのはかなりの範囲までは許容範囲？大学で音楽を教えているウィルソン教授が通勤のために毎朝乗るベッドリッジ駅は東京の東急東横線の田園調布駅のような雰囲気だが、駅長のカール(ジェイソン・アレクサンダー)が一人で仕切っている感じをみると、規模はかなり小さい。田舎の駅という意味では私がかつて住んでいたJR関西線(大和路線)の法隆寺駅レベル？上野教授が通っていたという渋谷駅も1924~1925年、つまり日本の中国への進出が始まる直前の大正時代末期は今のような大ターミナルではなく、本作のベッドリッジ駅のようなレベルだったのだろう。

次に住居。ウィルソン教授の家と渋谷の上野教授の家の大きさはもちろん段違いだろうが、駅から徒歩の距離は同じようなもの？そしてコミュニティ。ウィルソン教授とハチ公の物語にウィルソン教授の妻ケイト(ジョーン・アレン)や一人娘アンディ(サラ・ローマー)らに関与するのは当然だが、地域コミュニティがなければウィルソン教授とハチ公の物語に第三者が入り込む余地はなくなってしまう。しかしウィルソン教授が通うベッドリッジ駅には駅長のカールの他、ウィルソン教授が毎朝コーヒーと軽食を買う駅前のホットドッグワゴンのオーナー、シャビール(エリック・アヴァリ)や、本屋のメアリー・アン(ダヴェニア・アクファデン)との地域コミュニティがあったから、彼らもストーリー構成上重要な参加者になることに。

もっとも健全な食生活の視点から言えば、ウィルソン教授は毎朝自宅で野菜中心の朝食を食べるべきであり、シャビールのホットドッグを食べるのは決してよろしくない。まだ若いウィルソン教授が教壇に立っている時突然倒れ死亡してしまったのは、きっと脳梗塞か心筋梗塞だろうから、ひょっとしてそんな悪しき朝食習慣がその一因？

ホンモノの「犬から目線」がいっぱい

子供を育てるには上から目線はダメ、あくまで子供の目線で、とよく言われる。そしてそのためには大人が現実に腰を下ろし、文字どおり子供目線で対話することが大切だ。車に乗った時でも普通の乗用車に乗った時の目線とエステマなどの座席の高いワゴン車に乗った時の目線の違いにビックリするはずだ。そういう目で本作を観ると、本作にはホンモノの「犬から目線」が多いことに気付く。普通の人間は地上1.5~1.8m前後の目線で世界を見ているわけだが、犬は地上30~40cmの目線で見ているから、そこで見えている景色は全然違うはず。そんな「犬から目線」は今まで体験したことがないから本作で多用されるそれはすごく新鮮。なるほど、ハチはいつもこういう目線でウィルソン教授たちの世界を見ていたわけだ。

後半の物語はハチ公一匹が頼り

犬と人間との結びつきをテーマとして物語をつくり、それをスクリーン上に表現するのは比較的容易。本作でも前半はウィルソン教授が子犬のハチと出会い、家に連れ帰り、

ハチの引き取り手を探し、結局妻ケイトの許可を得てハチを家で飼い始め、成長したハチとウィルソン夫婦が楽しく過ごし、ハチが毎晩5時にベッドリッジ駅までウィルソン教授を迎えにくるようになるという物語が手際よく描かれていく。そして観客はそんなわかり切ったストーリーを安心して楽しむことができる。ところが、大学での講義中突然ウィルソン教授が倒れ、あっさり死亡してしまった後はハチだけの力で物語を組み立てクライマックスまでもっていかなければならないから、そんな脚本を書くのは大変だ。

後半の第1のハイライトは結婚したアンディ夫婦の家に引き取られたハチが家から逃げ出し、自力でベッドリッジ駅までたどり着きじっとウィルソン教授を待つというストーリー。日常生活の中であの人に裏切られ、この人に裏切られという体験をたくさん持ち、人間なんて信用したらロクなことがないと思いつ込んでいた傾向が強い現代人なら、誰でもこんなシークエンスを見れば「おっ、人間よりハチの方がよほどマシだな」と考え、身を乗り出すはずだ。

そして、こんな事前にわかり切った話で涙を流すはずはないと思っていた私ですら、思わず涙を流すシーンが続いて登場する。それはウィルソン教授の妻ケイトが久しぶり(10年ぶり?)にベッドリッジ駅を訪れた時に、そこでじっと座って主人の帰りを待ち続けるハチと再会するシーン。新聞でベッドリッジ駅で待ち続けるハチのことが取り上げられ、以降「ハチ公基金」のようなものができたのだから、ケイトがそれを知らないはずはないが、そういう脚本上の整合性はさておき、このシーンには思わず涙すること確かだ。そんな後半のクライマックスシーンまで一人(いや一匹)で主役を張り続けたのだからハチは立派!

出演料はHow Much?

毎年俳優の出演料の高額ベストテンが発表されるが、08年6月から09年6月の間に稼いだベスト1は男性はハリソン・フォードで6500万ドル、女性はアンジェリーナ・ジョリーで2700万ドル(米経済誌フォーブス調べ)。しかして本作の主役ハチを演じた秋田犬の出演料は?成犬のハチを演じたのは一匹ではなく3匹の秋田犬だが、これはきっと買い取りではなくレンタル。もちろん映画撮影のためのレンタルだから、犬そのものの費用以上にドッグトレーナーの費用が多額かもしれない。また人間ならドジな俳優は何度もミスをするから撮り直しが必要だが、名優は一発オーケーが常だからムダな時間とムダな費用を使わなくて済む。しかし犬の場合は必ずしも監督や撮影監督の命ずるとおりに動いてくれるわけではなく、限りなく犬のペースに合わせなければならないからその時間やムダなフィルム代がかかるのは仕方ない。しかし、ハッキリ言ってそんな費用は出演料の高い俳優を一人起用することに比べれば安いもの。すると本作に主役としての他、製作者としても参加したリチャード・ギアは低予算の本作が高額の興行収入を上げればボロ儲け?

2009(平成21)年8月16日記